

# まちづくりセミナー 開催結果報告

**開催日** 平成22年11月6日(土) 13:00~15:50

**会場** 釧路町 遠矢コミュニティセンター 大ホール

**参加者** 177名 (一般65名、町内会5名、企業等4名、町議会議員10名、自治体職員50名、協働のまちづくり活動団体31名、その他12名)

## プログラム

スーパー公務員

### 1 基調講演：木村 俊昭 講師 「できないをできる！に変える」

きむら・としあき。1960年生まれ。北海道遠軽町出身。1984年小樽市入庁後、財政部、議会議務局、企画部、総務部、経済部を経て、産業振興課長、企画政策室主幹(プロジェクト担当)。2006年4月から内閣官房・内閣府企画官として、地域再生策の策定・推進、「地域と大学との連携」、地域再生制度事後評価、政府広報活動のほか、地域再生に関する調査研究を担当。地方再生戦略は九州圏・沖縄県担当。2009年4月から農林水産省大臣官房企画官として地域の担い手育成、地域ビジネス創出など、主に農林水産業を中心とした「地域と大学との連携」などを担当。

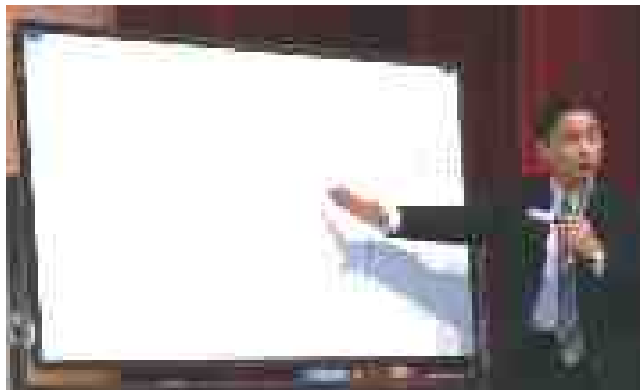
### 2 こども未来研究所 アンケート結果発表

### 3 パネルディスカッション 「オール釧路町で行う地域活性化」



## 「やねだん」の事例について

- ・ 「やねだん」は鹿児島県鹿屋市にある町内会である。
- ・ 260人の町内会で、会長は豊重さんという元銀行員の方で、銀行を退職し、故郷に帰ってうなぎ屋をやっていた。商売も軌道にのった頃、町内会を振り返ったとき空き家だらけで子供もいない現状に気づき、町内会長になった
- ・ 町内会長になってからは、自分達の町内、地域を建て直すために、「子供」「文化」をキーワードに「全員参加・全員野球の町内会」を目指した。
- ・ 土着菌をつかって畑を耕し、その土着菌を使って焼酎や味噌を販売始め、当初、500万円の収入を得、その収益をもとに、子供たちのため寺子屋を始めた。
- ・ さらに、空き家の家主に連絡をとって、町内会で修繕するので無料で貸してほしいとお願いし、全国からアーティストを募集し、現在7人のアーティストが住み、町内会の収益をもとに「迎賓館」をつくり、町内会手作りの芸術祭を開催している。
- ・ 収益をもとに、高齢者のリハビリと子供のふれあいの場として公園を町内会が整備した。
- ・ 「やねだん」の活動は、海外のテレビで紹介され、その放送を見た韓国のホテルのオーナーが「やねだん」の焼酎を置く居酒屋を開設したいというオファーが来た。1300本のやねだん焼酎をおろし、「やねだん」という居酒屋が韓国でオープンした。



- ・ やねだんの20人が韓国に視察に行った際、1300本、一本あたりの原価2300円の焼酎が、ボトルキープで16,000円の値段だった。韓国で人気が出たため1500本ずつ入れてほしいとの依頼があり、町内会が貿易を始めることとなり、また韓国とやねだんの子供たちとの交流が始まった。町内会がさらに「国際交流」を始めた。
- ・ やねだんは、ボランティアはなく、収益によって町内会の人達にボーナスを払った。
- ・ 収益が上がっていることを知って、税務署が来た際に、住民は、「経営を認めてもらった」と非常に喜んだという。
- ・ 町内会が稼いで、収益が大きくなり、行政に対して交付金を出すという動きになっている。



**以上のような行政に頼らない、むらづくりを行っている。**

## 沖縄県伊江村の事例について

- ・ 別の例としては、沖縄の伊江島には、小学校・中学校しかなく、高校には沖縄本島に行かねばならない島がある。
- ・ さらに島には、本屋が一店舗もなく、中学校の修学旅行「書店を見る時間」があるほどである。
- ・ 図書交流費は1年間で15万円程度であった。
- ・ 地域の人達は「小学校・中学校しかない」ではなく、「小学校・中学校がある」と考え、取組みを始めた。
- ・ 小学生・中学生のうちに、島で一生懸命働いている人を知ってもらう取組みをまず始める。
- ・ 県立芸術大学と島の小学生・中学生がパッケージをデザインして、漁業協同組合のイカ墨ジューシー（ご飯の素）を販売し始め、その売り上げの2%から5%を図書購入費に充てた。
- ・ 結果、18ヶ月17万パック売れた500万円の利益がでた。



**地域でばらばらに動くのではなく  
一体となった場をつくり、一緒にやっていくことが大切！**



## 「地域活性化」について

- ・ 地域に人材を定着させることが必要である。小学生や中学生に関ってもらったり、大学生や地域の人に関ってもらうことが大切である。
  - ・ そのためには、**地域でがんばっている人をきちんと評価**し、歴史に残さなければならない。その評価として、地域でがんばっている人の活動をDVDに残す。
- ・ 例えば、おじいちゃん・おばあちゃんが、まちのためにどんな努力をしたかを知りたいければ、町立図書館、道立図書館に行くとDVDが見れるとなれば、子ども達、若い人達が自分達のまちに住みたいと思うはずである。
  - ・ まちの空き店舗をどうするか、企業を誘致しよう、家賃や固定資産税を補助しようというのは、部分的な最適化である
  - ・ 温泉地にお客さん呼び戻すためのイベント、これも部分的な最適化である
  - ・ 「企業を2社誘致しました。今後、5社に誘致を増やします」と首長が言ったとしても、まちの企業にとって害になっていないかを考えるべきである。

- ・ 地元で仕事をしている企業や産業を、利より害にならないようにするためにどうするか？まちにとって利となる、地域にとって利となるためには、「女性や若手や退職後の高齢の方が活躍する場があるかどうか」「新しい産業をつくりあげる必要性はないか」をよく考える必要がある。



- ・ **部分的な最適をつないで**いって、町全体が最適となるかをよく考える必要がある。
- ・ ライフサイクルをきちんと描けなければ、その地域に住みたいとは思えない。
- ・ 誰でも自分の娘・息子・孫を厳しいところには行かせたくないはず。
- ・ 地元で収入を確保し、身内を住ませたいと思わせることができる地域にしなければならない。
- ・ 「地域活性化」に関していくのであれば、所得、税収が上がったかどうかをきちんとみななければならない。
- ・ **学校の先生と地域との関わり**も大切である。
- ・ ある先生が、小学生に「お父さん・お母さんの経済状況を調べてください」という宿題をだしたところ、「お父さんはボーナスがでない、お母さんはパートを切られる」という結果が多かった。そうすると、このまちは、「大変なまちである。ボーナスもでないし、パートに行っても切られる」と思ってしまう。
- ・ そうならないよう、**まちで汗を流している人に会いに行く**ことが必要である。
- ・ 「先生は、大変だけどこのまちが大好きである。このまちを支えるリーダーになってくれる人を期待する」と、小学生がのうちから言っていくべきではないか。
- ・ 高校生のうちに地域の企業を回って、農家や漁業など、**がんばっている人を見る機会をつくる**ことで、自分も地域で働きたいという意識になるのではないか。
- ・ 部分的に個別的に良くしていく「最適」では、継続・進化していかないものである。
- ・ 地域のための活動が、5年、10年と続いていかないということは、それがボランティアになっていないかということである。
- ・ 人材を地元に着すために、小学生のうちから**地元の会社や産業を知る機会をもつ**。
- ・ 高校生が8年実務経験をもつと、大学院の修士課程をとることもできる。地元で活躍できるということをもっと知らせるべきである。



**地元でがんばっている人の記録を残し、伝えていくことが必要！**

**活躍する場を用意し、子孫に残していくシステムや体制が必要！**



## 2

## こども未来研究所アンケート結果発表

こども未来研究所の研究結果（P10～P13）について、下記の小学生が発表しました。

- 別保小学校 柳沢 怜弥（6年） 日向 理乃（6年）
- 遠矢小学校 角木 駿斗（6年） 中原 和香（6年）
- 知方学小学校 外崎 綾夏（6年）
- 富原小学校 佐藤 凌輔（6年） 上野 清楓（6年）



## 3

## パネルディスカッション 「オール釧路町」で行う地域活性化



コーディネーター：木村 俊 昭 氏（農林水産省大臣官房政策課企画官）

パネリスト：土井 茂 人 氏（まちづくり推進審議会 会長）

佐々木 大 剛 氏（NPO法人ゆめのき 代表）

椎 野 清 一 氏（昆布森漁業協同組合 専務理事）

石 山 智恵子 氏（釧路町女性連絡協議会 副会長）

佐 藤 広 高 （釧路町長）

## 現在の活動・今後の展開について

### 土井茂人氏

- ・まちづくりは住んでいる住民中心でなければならない。
- ・自分達で、できるものとできないものを見据えていこうと活動。
- ・「よあーしゃってやろう！」という気持ちが必要。
- ・地域で眠っている、特に高齢者の「知識」をもっと活かしていくべき。「寝ているひとを起こせ」といつも考えている。
- ・商工会の会員に勧誘しても「何かいいことがあるのか」という考え



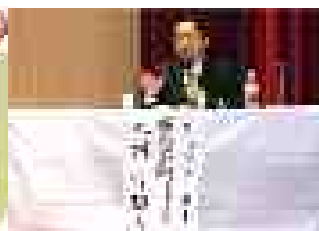
が先にたっつてしまい、新しい入会はおぼつかない現状。

- ・ポスフルは商工会に加入しているが、沿道の大企業は未加入。
- ・町内の企業が、協働でまちをつくっていくために、協議会の設置を検討中。
- ・地域を活性化するためには、まず、口に出して言う必要がある。
- ・「いい仕事」をするためには、すべてNOではなく、自分の能力を考え、これならできる、ここまでならできるといふところを引き出すことが必要。
- ・釧路町にあるものをまず、食べてみる、買ってみる、おいしければ、それを子供や家族に伝えていくことが、地域の活性化させていくためには大事。
- ・**今後の展開**だが、商工会でお互いどんな商売をしているかがわかる「事業所マップ」を作成したが、良すぎるものを作成したため、満足してしまった。
- ・物事なにかをすすめるときは、いいものをつくろうと思うが、いいものをつくると次のステップに進めなくなる。
- ・これからは、横の連携を密にし、交流するネットワークをつくっていく必要があると考える。

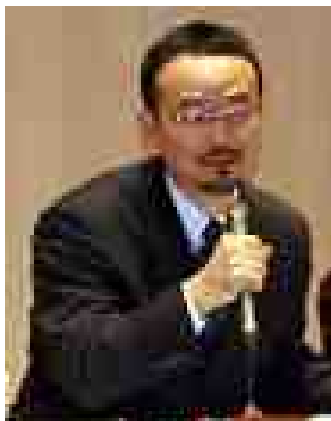


### 木村氏 コメント

「青森正直村」は、中小零細企業が連携し、県内の2割のお客さんに地元のものを買ってもらおうという取組みしている。土井会長の話を聞き、地域の持ち味、良さを住んでいる地域の人知って、活かしていく取組みが必要であると感じた。



### 佐々木大剛氏



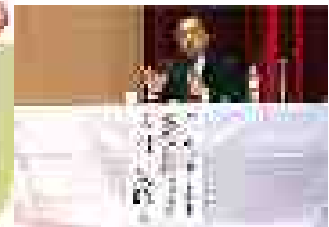
- ・NPO 法人ゆめのきは、遠矢地域で、小規模多機能型の介護事業を行っている。
  - ・当初は、その介護事業の生まれた財源で地域活動をしたいと思っていたが、なかなか進まない現状。
  - ・ゆめのきとしては、「ほかほか食堂」や「カラオケサークル」などの地域交流を実施し、「ゆめのき釧路町収穫祭」を開催し、地場産のものを使った出展をしている。
  - ・自分は、整骨院の仕事の中で、昼の1時から1時間と8時以降の動ける範囲で動いている。
- ・とりあえず「やってみる」という気持ちでやってみる。一生懸命動いている人や、面識のある人からの頼まれごとは、やりましょうと答えるようにしている。「できない」という理由を消去することにしている。
- ・ゆめのきとしては、安心した地域にしたいし、子供たちが遠矢に戻ってくるまちにしたい。地域の高齢者が楽しく暮らし、大人が地域で楽しく暮らすことによって子供たちももどってくるのではないかと考えている。
- ・個人的には、子供が2人いる。仕事から帰ってから、疲れたとか仕事が大変だと絶対言わないようにしている。その結果、後を継ぎたいといってくれている。理由は楽しそうだから。
- ・**今後の展開**だが、「町民参加と協働のまちづくり基本条例」をゆめのきとしてどう使っていくかがテーマである。身をもって使っていきたいと考えている。

- ・介護分野では、特養で死ぬのではなく、自宅・地域で死ぬことができる環境をつくっていきたい。死が身近になることで、生きることも身近になると思う。父が自宅で死んだことがNPOを始めたきっかけになっていると思う。
- ・高齢者下宿を自宅と変わらないイメージにしていきたい。
- ・町内会は、すべてが町内会会員になってくれるのがベスト。会費を納入してもらうために、目に見えるメリットを作りたい。
- ・そのためアイデアとして、「町内会に加入している、または会費を納入している」証としてパスポートをつくり、それを提示すると割引やサービスが受けられるようにしていきたい。
- ・町内会が100%加入率になることで介護事業にも大きな影響があると思う。
- ・「介護」といえば、高齢者は子供に迷惑をかけたくない、と言っているために、「介護は迷惑をかける」というイメージになってしまう。そうならないためにも、子供には面倒を見るのが当たり前という形にしていきたい。



### 木村氏コメント

自分自身が楽しくなければ、周りも楽しくない。  
小田原市では、地域内の60店舗以上で割引サービス等を受けられる「小田原手形」を製作している。釧路町版「手形」ができれば良いのではないかな。



### 椎野清一氏



- ・昆布森漁業協同組合は、戦争が終わった昭和24年に組合が設立された。組合員は244名である。組合の売上は37億円。
- ・組合員になるには、120日漁業に従事することが必要。
- ・今後は、地域に残って暮らしていけるかが課題である。
- ・昆布と鮭で売上の7割を占めている。
- ・昆布漁は、昔は流氷がきたら不漁であったが、流氷は海底を綺麗にしていってくれたため、漂着の翌年度は豊漁であった。しかし、近年は流氷がこないため、雑草は増え始めた。これらの雑草を駆除しなければ昆布は育たないし、良いものが獲れなくなるので補助を受けて雑草駆除を実施している。そのため13億の水揚げをキープしている。

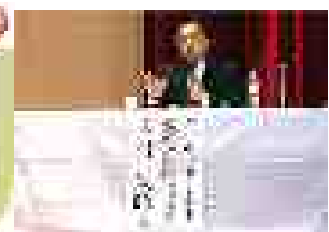
- ・後継者問題が叫ばれているが、後継者にするには、所得が向上しなければ、後継として残らないし、残したくない。
- ・昆布森漁業協同組合では、所得の向上のために「養殖」を実践している。まず第1に牡蠣である。冬場になると出稼ぎへ行く漁業者のために、冬場でも仕事ができるようにしてきた。第2に「うに」である。これも安定した収入を得ている。
- ・また、漁協女性部は「すりむ昆布」の生産・販売や、漁協青年部も「ふるさと小包」でがんばっている。昆布森の昆布は、漁協や別保コミセンで発売している。
- ・ブランド化とよく言うが「安心」こそがブランドだと思う。

- ・ **今後の展開**だが、ブランドの確立をどうするか、勉強中。みなさまにいいものをいかにとどけるかが大事だと考え実践している。
- ・ 昆布森産の「トキシラス」は「船上活メ時鮭」として身に「タグ」をつけて、ブランド化している。獲ったらすぐに血抜きをするので、日持ちが良い。捌いたとき血が出ないといったメリットがある。
- ・ 同じ取り組みとして「昆布森産毛蟹」にも「タグ」をつけて販売している。これに関してもブランド化に向けて頑張っている。
- ・ 昆布は、釧路町の給食に100キロ寄付している。その成果として、こども未来研究所において、1番にノミネートされ大変嬉しく思っている。いままでもこれからも釧路町の子供たちには、昆布森漁協に社会見学に来られた時は、12メートルの昆布もたせたいと考えている。
- ・ 今後は「昆布森」という名前を「ブランド」にしていきたい。付加価値をつけながら地域活性化につなげていきたいと考えている。



### 木村氏コメント

これからは、30年以上地域で働く「行政」、「学校の先生」、「商工会」、「漁協、農協の常勤理事」がすべての情報を共有していかなければならない。このまちは「何が必要なのか」を考えるべき。地域で主要産業を支えることが大切である。



### 石山 智恵子氏



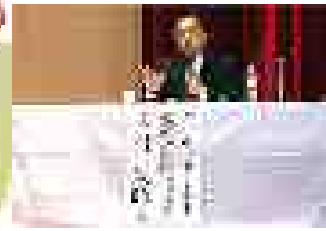
- ・ 私の住んでいるところは別保地区の全戸数96戸の町内会。
- ・ 9年前より民生児童委員となり個人情報保護法ができ、行政担当者からの情報が得られない中、活動していたある日、町内で孤立死に遭遇した。発見の前日、訪問したときに反応が全くなかった。いつもと違うと感じたので、娘さんに連絡をしたが、安否確認をしきれなかった。すると翌日再度訪問すると、状況に変化がないので役場に連絡し、現地確認したところ、死後12時間位だった。
- ・ この経験から、自ら行動を起こさなければ、それができなければ何も始まらない、自分自身の情報を持つべき思い、町内全戸の家族構成を自分の足で稼ぎ、把握することができた。
- ・ 近年、地域の交流が希薄になり、「かかわりを持ちたくない」「わずらわしい」傾向になってきているが、高齢者、若い人（子ども）も誰か一人でも自分のことを見てくれている、知ってくれていることで安心し、この町内に住んでよかったと思ってくれるように“おっせっかいばあさん”、“おっかないおばさん”を今後も続けていきたい。
- ・ **今後の展開**だが、まちづくり条例の運用面もあります。基本的には、町内会が活発であれば、まちづくりにつながると思う。
- ・ 若い人の家庭に立ち入り、お父さんお母さんも安心して仕事が出来て、こどもに何かあれば、保護者に連絡できる体制づくりをしていきたい。





## 木村氏コメント

中野区では、独居老人を支えていくためには地域の人で助け合わないといけないと考え、独居老人等の「個人情報」を地域で共有できるような条例を施行するため、区長が地域を1箇所ずつまわって説明している。これからの行政は、町民にとって何が大事なのかを考え、実施していくことが求められている。



## 佐藤 広 高 氏



- ・町では、「町民参加と協働のまちづくり」をすすめており、このセミナーもその一環である。
- ・協働は昔からあったものである。昔は、町民は提案する人、実現するのは行政。これが広い意味で協働であった、と思っている。
- ・今後は、行政だけが汗をかくのではなく、地域にみなさんも汗を流すことによって、釧路町をともに作りあげているということを感じ、それが誇りとなるのではないかと考えている。
- ・条例をつくり、地域のやることに支障があり、制度的なものや制度を知らなくて活動が滞っているのであれば、町がお手伝いしていくことが、行政の大切な仕事ではないかと思う。もっともっと行政のもつ情報をお知らせして、一緒に地域をつくりあげる「一体感」を地域、町民、企業などみなさんで一体感をもってすすめていきたい。

- ・**今後の展開**だが、現在、町内の企業の方々が「協働のまちづくり」に一緒になって取り組みたいという機運が高まっている。
- ・企業が寄付金を出すだけでは、協働のまちづくりとはいえないが、地域の人のために何か貢献している事業を今後「認証」し、こういう企業を大切にしたいと考えている。
- ・「町民参加と協働のまちづくり基本条例」ができてすぐ明日からよくなるとは思っていない。今後、有効になるよう、改善すべきところは改善していきたいと考えている。今までの概念を捨てて「協働のまちづくり」をすすめていきたい。

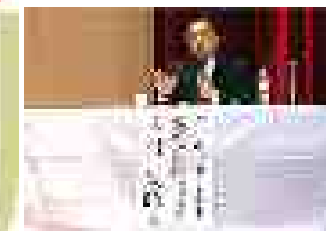


## 木村氏コメント

客体から主体性をもって情報を共有し役割分担してやることが大切。

茨城県守谷市では、旧住民が1割で新住民が9割になった。市長は新住民と仲良くするために協働のまちづくりの条例をつくり、同じ場で話しあい、一緒になって作りあげている。

釧路町版「協働のまちづくり」は町長が言われたように、今後も発展し進化していったらいいと思う。



---

## 第5次釧路町総合計画策定進捗状況報告書 【まちづくりセミナー】

担 当： 釧 路 町 総 合 計 画 策 定 会 議  
事務局： 釧路町まちづくり推進課 総合計画担当  
〒088-0692

北海道釧路郡釧路町別保1丁目1番地

TEL 0154-62-2310 FAX 0154-62-2713

Mail machi\_kikaku@town.kushiro.hokkaido.jp

URL <http://www.town.kushiro.hokkaido.jp/>

---